

# 真鍋のサクラ培養成功

## 新保存法として注目

### 住友林業 細胞若返り、病害に強く



培養成功を喜ぶ関係者ら = 土浦市真鍋の真鍋小のサクラ前

住友林業(本社・東京都千代田区、市川晃社長)は2012年から取り組んできた、土浦市立真鍋小学校の校庭にある県指定天然記念物「真鍋のサクラ」の組織培養にこのほど成功した。同社筑波研究所(三川卓所長)の研究員らが記者発表して明らかにした。ソメイヨシノの増殖は世界初といわれ、増殖苗は元の木よりも若返り、病害虫にも強い特性をもち、新たな保護、保存方法として注目を浴びそうだ。(小石川哲也)

校庭の中央に陣取る。同社で研究開発を進め、3年の年月をかけて、このほど成功した。110年を超え、樹勢の衰えとともに、後世に伝えられるか懸念を募らせた「真鍋のサクラ保存会」(菊田和衛会長)が市とともに、後継稚樹の増殖を依頼した。中村健太郎主任研究員によると、ポイントになったのは組織培養液の成分。通常はショ糖が成分だが、

が、今回「トレパース」と呼ばれる特殊な糖分が必要と判明するまでに時間を要したという。

研究ではまず、冬の間、芽を採取し、その分裂組織を顕微鏡下で摘出。試験管に移し、専用で開発した培養液の中で垂直にゆっくりと回転培養しながら大量の芽(多芽体)をつくる。



真鍋小児童たちも興味津々

さらにそれを培養して芽を伸ばし、1本ずつ切り分け、発根を促す人工培養土に植えつけて幼苗を作り上げる。ここまですべて無菌状態で行う。その後、温室で育苗して環境に順応させて苗が出来上がる。

この組織培養法による増殖苗は、元の樹木の樹齢に比べて若返りする可能性が高く、かた、病害虫の感染も少なかった。しかし今日、

同社によると、ソメイヨシノは江戸時代末に染井村(東京都豊島区駒込)で育種され、流通している情報もある。一方、「真鍋のサクラ」を進める。

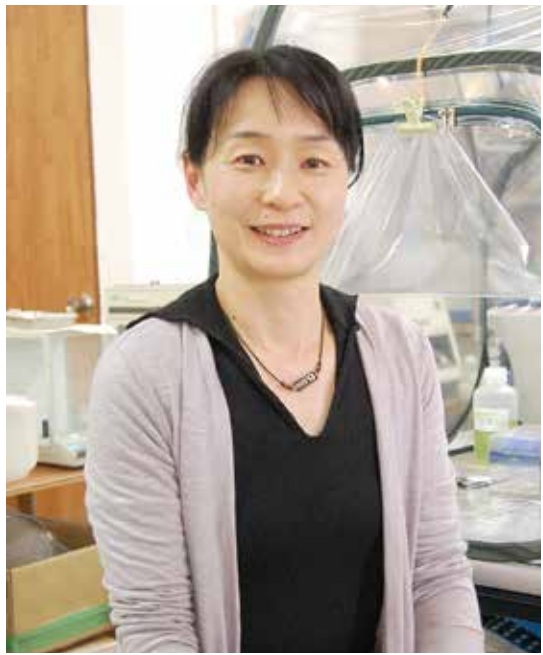
「真鍋のサクラ」は、以前からやりたかったが、田んぼアートのコシヒカリを開発したい」と、2009年、起業に踏み切った。前職でのスキルを生かして、試業の開発や販売で運営資金を得る傍ら、

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」



リーズ社長

### 門奈理佐さん

つくば市天久保のビルの一室。ドアを開けると、奥にキッチンを改造した実験室。家庭用品を利用した実験装置も見られ、使い手のさり気ない工夫が光る。

## 主婦の力、農業研究に生かす

らもう人の社員も子育て真っ最中の主婦だ。東大大学院を修了後、農業生物資源研究所でイネのゲノム研究に従事。その後、植物

たいことと家庭を両立したい」と、2009年、起業に踏み切った。前職でのスキルを生かして、試業の開発や販売で運営資金を得る傍ら、

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」

「次は、葉の色が違う」



※すでに常陽新聞をご購読いただいている法人様は対象外となります。 ※他のキャンペーンとの併用はできません。